

詩篇 1 : 3 - 4 (パワポ)

Preface

先週は、詩篇 1 篇の著者だと考えられるダビデが、神の霊に導かれて、人を二種類に分類したその内容について見て参りました。

流れのほとりに植えられた木のような幸いな人・正しい者人と、風が吹き飛ばす籾殻のような幸いではない人・悪しき者の二種類です。

聖書は、その違いを深刻に語り、またその違いの深刻さゆえに、イエス・キリストなる救い主を通した救いが、私たち人間に必要なことを確認致しました。

そして今朝は、幸いではない人・悪しき者を例えるために用いられた、籾殻の四つの特徴について探っていきたいと思っております。

Part One

籾殻の一つ目の特徴は、残滓、残りかすだということです。

籾殻は、実を覆っていた外側の皮で、脱穀した後の残りかすです。

収穫の価値であり、いのちであり、力を表す実を取り出した後の残骸が籾殻であり、大概、ごみとして捨てられることが多いように思います。

この籾殻の特徴を人に当てはめるのですから、ある意味、耳を塞ぎたくなるような特徴であり、決して耳に心地よい話ではないかもしれません。

先週も確認しました通り、悪しき者とは、『神はいない』と言うすべての人、救い主イエス・キリストがその内に居ない人、神の言葉を慕わない人のことだ』と聖書は言いますが、この悪しき者の特徴が残滓、残りかすだということです。

イエス・キリストがその内にいない人は、「実を取り出した後の残滓のようであり、いのちと価値と力のすべてが消え去った残りかすのようだ」と言います。

すみません。言葉が過ぎるでしょうか。

でも聖書がそのように教えて下さるので、そう語るしかありません。

ただこの表現は、聖書の教える本来の人間像から考えますと、これほどの射た表現もないように思います。

私が初めてイエス様に会い触れられた時の状態は、正に、残滓、残りかすでした。中身のない、燃えるゲヘナに投げ込まれることが当然のゴミだったと思います。

そして、そのようなことを、こんなにも真っ直ぐに、率直に語られたこともなく、語ってくれた人もいませんでした。

ですので、実の無い残りかすに過ぎない、神の前において人として最も大切な

ものが欠落しているという本質的な事実を知り、申し訳なく、妙に合点が行ったような気がしました。

それと同時に、その実の無い私の内に、イエス様がお入り下さったことに得も言われぬ安堵感を覚えました。

「ああ、もうこれで地獄に落ちなくていいんだ」という究極的な安堵感です。

聖書は、「人は墮落した。人は、たましいを失った存在だ。いのちを失い、人として本来神に望まれる姿に生きられない的外れな罪人であり、死んでいる者であり、死に行く者でしかなくなってしまう実の無い皮っかすでしかない。神の前に、天地万物の下に、神の霊を失った肉に過ぎない存在になってしまった状態だ」と教えてくれます。

創世記 6 : 5 - 6, 11 - 12 (パウロ)

ローマ人への手紙 3 : 10 - 18 (パウロ)

これが、生まれながらの私たち人間の自然の姿であり、生まれながらの醜い、汚れた、ずる賢い、高慢ちきな悪しき者としての人の姿です。

これが何を意味しているのかと言いますと、人はもう、最初に神によって創造された本来の姿をもって生まれ出て来ることはない、出来なくなってしまったということです。

神さまが元々お造りになられた人の最も偉大で、最も高貴な面が消え去ってしまっているということです。

世の中には、何でも色々なルールがあるのだろうかと考えますと、ルールを定めないと、欲に従って、悪しき本能に従ってどこまでも行ってしまふからなんだと思います。

「いや、そんなことまで、規則やルールなんかで取り締まる必要はないんじゃないの?」と思ってしまうことがあります。規制やルールや人の目がないと、いくらでも墮ちていってしまうのが、私たち自然のままの人間なんだと思います。

例えば、ルールの中で行われるスポーツ競技一つとっても、ルールぎりぎりのことをしたりします。

または、ルールを破っても、破っていないように見せる技術までいつのまにか身に付けてしまうこともあります。

スポーツ観戦においても、観戦で終われば良いですが、自分の中に沸き立つ攻撃性や勝りたいという欲求を投影させて、代理戦争のようにしてしまい、実際に死者まで出してしまったり、特定の人を誹謗中傷してしまうようなことも起こります。

毎日情報として途切れることなく入って来る世の中の、人々の千差万別色とりどりの悪しき動向そのものが、神が最初に人を創造された姿からは遠く離れ

ているだろうことは一目瞭然、何となく人間皆が本能的に「それは違う」と、何となく感じているように思います。

神は人を最初に、そんな悪しき者としてお造りになりませんでした。

なのに人は、実の抜けた、実の無い抜け殻、糲殻、残滓、残りかすのようになってしまいました。

神が与えたいのちは消え去り、高貴な神の品性を失い、たましいを失ってしまいました。

だからイエス様は、「わたしは、失われた者を探して救うために来たのです」と仰せられたわけです。

Part Two

私たち人が、「失われた者」と言われるようになった失ってしまったものとは、神のかたちです。

最初に神が人をお造りになった時の神のかたちを失ってしまいました。

人は最初に、神によって、神のために創造されました。

人は神と関係している存在であり、神の友として創造され、神が聖なる方であったように聖なる存在でした。

神を喜び、神と交わることが祝福でした。

神が霊であられるように、人も霊なる存在であり、霊における神との交わり、神と言葉を交わすこと、神の御言葉が幸いでした。

幸いとは、三位一体なる神様との関係の中で生まれ、その関係によって培われる私の霊・たましいの状態によるものですね。

つまり、聖書の語る罪人とは、「まことの幸いを失った人」とも言えるのだと思います。

人は罪人となり、墮落し、今となつては、「聖なる」と呼べるような姿は、生まれながらの自然のままの姿にはありません。

もちろん、人それぞれ「良いところ」はあるのかもしれませんが、その「良いところ」でさえも、実のところ、生まれた瞬間から接し続け、教えられ続け、拘束され続け、説き伏せられ続けている、人の定めたありとあらゆるルールや規制やモラルや倫理観などによって否応なしに成形されて来た、いびつで、不自然な偽善的な「良いところ」なのかもしれません。

私自身、生まれたままの私という人を、私なりに省察して見ても、「もしルールや規制や人の目が無かったら、良い人の振りしながら生きることなんか出来ないだろうなあ」と、正直思います。

ましてや、自ら進んで神を喜ぶ？ 霊的な存在？ そんなものなんか生まれながらにして一切備わっていない肉なる者、実を失った、神のかたちなんか露ほどにも備わっていない、残滓、残りかす、糲殻のような、ただただ、墮落した人間だと認めざるを得ません。

16世紀から17世紀にかけて、聖書信仰に立ち返ろうと励んだピューリタンと言われた方々のある一人の方は、罪と墮落によってあらわれる人間の姿を、どこかの田舎町に取り残され廃墟と化した古い城に例えました。

うっそうと茂るツタに周囲を縛られるように纏わりつかれ、蜘蛛の巣とカビに完全に覆われ、パッと見ても、すぐに廃墟だということが分かるような古城です。

近くに行き、掲げてある扁額のようなものを見ますと、「誰々という者の住まい」と書かれており、その城はかつて、高尚な貴族の家だったということが分かります。

でも今は、その貴族も住んでいない崩れ落ちた廃墟でしかありません。

そして、「この廃墟こそが、人だ」と言いました。

「かつて、天地万物をお造りになられた神の霊が住んでいた廃墟、それが、神を失った人の姿だ」と言うのです。

人はかつて、神に造られた被造物の中で、比類なき最も高貴な存在でした。

造られたものの中で唯一、その内に神がお住まいになって下さったからです。

しかし、神を失い、罪と墮落によって肉の塊となってしまった人は、中身の無い、実を失った、主のいない皮っかすだけの存在、籾殻になってしまいました。

だから、使徒パウロは、イエス・キリストというまことの神の現れなるお方を信じる者は、その内に神の霊がお住まい下さるといふ、人としての本来の姿に造り変えられた、人にとって最も大事なものを回復させて頂いた者たちだと言います。

コリント人への手紙第一 3 : 16 - 17 (パウロ)

ヨハネの福音書 14 : 17 (パウロ)

私たちすべての人間は、まず、自分自身が廃墟のような存在であることを知らなければなりません。

そして、すべての人間にとって、必要な唯一のものはイエス・キリストを信じるという、信じられてしまうという信仰であり、唯一必要なお方は、天の下でこの方以外には救われるべき名が与えられていない救い主イエス・キリストです。

自分自身が廃墟であるということに気付かない限り、イエス様はその内にお帰りになることも出来ず、イエス様によって本来の人らしさを回復させて頂くという福音を信じることも出来ないでしょう。

でも、信じた人は、信じさせて頂いている人は、木です。

生きている、いのちが通っている有機体です。

いのちの無い籾殻ではありません。

Part Three

籾殻の二つ目の特徴は、形がないということです。

削られて出て来たほこりやちりのようなものが、ただ積み上がっただけです。

積み上がっているのです、一見しますと、形が出来上がっているように見えますが、持ちこたえる力が無いせいか、その形じみた積み上がったものは崩れ去り、少しずつ散らばっていきながら、形無き事を露呈してしまいます。

詩篇1篇は、これこそ、悪しき者の特徴だと言います。

老若男女関わらず、自らの本来あるべき品性や神のかたち、思いや幸いを失ってしまった姿、どう定義していいのか皆目見当がつかないぐらいの形無き姿。

その生き方に法則はありません。

信じるに値しないものを信じたいように信じ、次の瞬間、何をしでかすか到底分かりません。

なぜそうなのか？

その生き方に、形が無いからですね。

その人生を導く道もなく、生き方全般にくまなく安心して影響を与えられ続けるに相応しい原理原則のようなものはありません。

以前、ケニアの市橋隆雄先生がめぐみ教会の礼拝メッセージの中で、「呪われた多様性」という言葉を用いてお話しされたことがありましたが、正に、絶対的な基準も法則もない多様性を装ったバックボーン無き、軸無き、拠り所無き、ただちりのような、ほこりのような、糲殻のようなものが集まった、いつ崩れてもおかしくない、いや、ずっと崩れ続けているけれども、崩れていないふりをしていただけの形無き姿です。

それに対して、木を見てください。

どれだけ美しく、軸が堅固で、安定しているでしょうか。

形がそうそう簡単に変わることはありません。

かと言って、偏屈、頑固ではありません。

時にはじっと待ち、時には葉を落とすこともあります、軸が、土台がしっかりとしているため、時に適って花を咲かせ、実を実らせます。

私たちのこの地球上のありとあらゆる生命体のいのちを支えているのは木です。

そのような者が、主イエス様を信じる正しい者であり、幸いな人だと言います。

「10人の正しい者がいれば、ソドムを滅ぼさない」と主なる神が仰ったこともありました。

イエス・キリストを信じる人とは、木のようなのです。

気分や感情によって、形なく崩れ去って行くことはありません。

その信じる道には軸があるため、たとえ道を間違えたとしても、引き返すことが出来ますし、引き戻されます。

「あなたが我に返り、あなたの神、主に立ち返り、私が今日あなたに命じるとおりに、あなたも、あなたの子どもたちも、心を尽くし、いのちを尽くし、御声に聞き従うなら、あなたの神、主はあなたを元どおりにし、あなたをあわれみ、あなたの神、主があなたを散らした先の、あらゆる民の中から、再びあなたを集

められる。たとえ、あなたが天の果てに追いやられていても、あなたの神、主はそこからあなたを集め、そこからあなたを連れ戻される」と、申命記30章でモーセが宣言している通りです。

イエス様を信じる木のような人は軸があるため、揺るぎそうになっても、バランスを取ります。

人生そのものを通して神を体験し、神との交わりという幸いの花を咲かせます。

イエス様がそのうちにある人は、今、目の前にあるものの果かなさを冷静に見つめ直すことが出来、目には見えない確かな永遠なるものを、神の国を待ち望むことに思いを馳せることの出来る確かな人です。

Part Four

籾殻の三つ目の特徴は、根がないということです。

木には根がありますが、籾殻には根がありません。

ただ、地面に積み上がっているだけです。

詩篇1：4の御言葉にある通り、「風が吹き飛ばす」籾殻です。

木は根があるために、風が吹いても飛んでいきません。

しかし、悪しき者、その内に主イエス様がいない人の悲劇は、その人には根がないということです。

根がないために、その人の人生は、表面的なものになってしまうでしょう。

もちろん、表面的に魅力的で、かっこよく、何かありそうで、華やかさを演出し、人の注目を集め、惹きつける何かを作り出すことは出来るかもしれませんが、根がないため重みがありません。

上っ面だけです。

確固たる、揺るぎない、流れや時代に左右されない巖のようなものがなく、その身を安心して委ねられる砦もありません。

時間の経過とともにうわべは剥げ、不安と見通しの無さが襲ってきます。

私たちは、私たちの人生において、果たして何を本当に分かっているのでしょうか？

死について、何を知っているのでしょうか？

未来に起こる可能性のあるもろもろのことについて、果たして、どのように対処していくことが出来るのでしょうか？

これこそ問題ですね。

根がないと、不安でしかありません。

人に会えば人に会っただけ気持ちは変わり、信念も変わり、宗教も変わり、思いや考えも、根がないために変わってしまいます。

使徒の働き17章を見ますと、2000年前当時、最高学府を誇り、最高の学を有していただろうエピクロス派とストア派と言われる哲学者たちは、「何か新

しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた」とありますが、世的に賢いと言われる人々でさえも、新しいと言われることやものなどに、根がない籾殻のように吹かれて行く毎日でしかありませんでした。

でも、キリストがその内にいる人は違います。

天地万物が消え去っても一点一画たりとも決して消え去ることのない、主のおしえを喜びとし、昼も夜も口ずさむことに根を張ります。

コロサイ書に行ってみましょう。

コロサイ人への手紙 2 : 7 - 10、3 (パウロ)

キリスト者とは、優しい人、良い人、何か良いことをしている人、何だかいつも喜んでいて幸せそうな人ではありません。

キリスト者とは、自分たちが、どんなお方を信じ、また、何を信じているのかを知り、そこに根を張っている人です。

「イエス・キリストでなくても、何かを信じて、それなりに目一杯人生を生きるならばそれでいいし、そういう人皆すべて天国に行く」というのは、人が嘘つかれている最大の嘘だと思います。

「悪魔サタンの最大のプロパガンダだ」と言えるでしょう。

もしそうならば、木も籾殻もありません。

木も籾殻も、違いはないということになってしまいます。

木にだけ根があり、根があるからこそ地に屈強に固定されます。

キリスト者は、神の御子イエスを信じ、ナザレのイエスこそ神のひとり子であり、生物学的父を持たず、聖霊なる神によって乙女マリアを通して、この病める滅びゆく地に神であられながら、私たち人類の罪の贖いのために罪なき人としてお生まれなされた救い主であられることを信じます。

なされた奇跡、語られた御言葉を通して、ご自身が約束のメシアであられる事実を証明され、私たちの罪の身代わりとなって十字架に架かれ、その身代わりの犠牲ゆえに、私たちが当然受けるべき永遠の滅びと罰から救われたこと、罪赦されたことを信じます。

そして、罪赦された者として、キリストが復活なされたように、霊的に、肉体的に、物理的に、物質的に、文字通り死より復活することを信じます。

聖霊によってキリストの証人とされたことを信じ、そのお方が私の内において執り成して下さっていることを信じます。

これが根です。

しかし、籾殻には根が無く何もないために、何を信じているのかが分かりません。どこにいるのかも分かりません。

風に吹かれながらあっち行ったりこっち行ったり、不安定で、不安です。

そしてやがて消えて無くなってしまふ死は、不安の行き着く先、終着点、いやその先にある永遠の苦しみを受ける滅びです。

でも、キリストをまことに信じる者にとっては、「生きることはキリスト、死ぬことは益です。私の願いは、世を去ってキリストともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです」という、死に打ち勝っているピリピ書1章の使徒パウロの告白のような根が、張り巡らされて行きます。

Part Five

最後に四つ目の籾殻の特徴は、いのちがないということです。

いのちがないために、成長もなければ、実りもありません。

実りだと思っていたものが、死と共に、すべて無に帰してしまいます。

どんな実績も、どんな功績も、どんな作品も、どんな経験も、どんなに素晴らしい思い出も、死を超えて持っていくことは出来ません。

「後世に残る素晴らしいものだ」と死ぬ前に言ったり思ったり、または、今の世にいる人がどんなに祀り上げたところで、死んだ人にとってみれば無です。

でも、木にはいのちがあります。

成長があります。

成熟があります。

花を咲かせます。

実りがあります。

その実ゆえに、誰かを助けます。

誰かのためになります。

誰かを愛すことが出来ます。

耐え忍んだ風、雨、雪、暑さ、寒さ、その通ったすべてが実りとなって表れ、その実をもって誰かを励まし、誰かを喜ばせ、誰かを慰め、誰かを力づけ、誰かに寄り添うことが出来ます。

そして、「あなたがこの小さな者にしたことは、わたしにしたことだ」というイエス様の言葉を頂きます。

いつのまにか、人を愛し、神を愛することが、喜びとなります。

さらにその喜びは朽ちてしまわず、天の御国に行った時、「よくやった、良い忠実な僕だ。お前はわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ」という神の言葉とともに、さらなる実を喜ぶことでしょう。

Conclusion

最後に、今日の説教を準備する中で、ずっと頭の中に思い浮かんできたことを分かち合って終えたいと思います。

それは、籾殻、つまり、米という穀物の脱穀した後の残りかす、米ぬかについてです。

この詩篇での籾殻と訳されているのは、小麦を脱穀した後の残りかすのこと

を指しているように思われますが、日本で粃殻と言うと、美味しいぬか漬けを作り出す米ぬか・ぬか味噌が思い浮かびます。

油をひかないフライパンで煎った米ぬかとひき肉を混ぜて作る、米ぬか肉そぼろという料理もあるそうで、「粃殻もそれなりに使い道があり、美味しいものを作り出すことも出来るよなあ」ということがずっと頭の中に思い浮かんできました。

でもよくよく考えてみますと、どんなにおいしいものであっても、食べられてら無くなってしまいうし、ぬか床だって、塩を加え、水を加え、だしを加え、唐辛子などを加えて管理してやらないと腐るし、結局のところ、粃殻は粃殻でしかなく、作り出された美味しいものも消費されて終わりだなあと気付きました。

それに対して木は、イザヤ書65：22で、主イエスを信じて永遠のいのちを与えられた者たちのその寿命を、「木の寿命に等しく」と表現されていますように、実のところ木の寿命というのは、長く生きても120年に満たない私たちには分かりません。

伐採したり、何か特別なことが起こらない限り、ずっと成長し続けるのが木ですね。

実際に、この地球上で確認されている生命体の中で最も大きい生命体も木です。

アメリカにいる時、好きで何度も見に行きましたが、セコイア国立公園にある「シャーマン将軍の木」という高さ83m、根元の直径11m、重さ6167トン、推定樹齢2200年のそのセコイアの木は、今も生きており、成長し続けています。

たぶん、イエス様が再臨されるその時まで成長し、生き続けるのでしょう。

シャーマン将軍の木のことを思い出しながら、「ああやっぱり、粃殻は、木とは全然違うなあ」ということを、私の小さな人生経験を通してでも、確認することが出来ました。

粃殻のような私たち、木に生まれ変わる術が、天地万物をお造りになられた父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体の神からもう既に、私たちに提示されております。

その提示された救いと共に、木として成長しながら生き続けたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：詩篇1：3－4